

年代	主要作品・できごと*
1200	鎌倉幕府成立
1210	無名草子(このころ)
1215	千五百番歌合(このころ)
1220	新古今集(藤原定家)
1225	方丈記(鴨長明)
1230	金葉集(藤原定家)
1235	金葉集(鴨長明)
1240	*源朝明、暗殺される
1245	愚管抄(藤原朝経)
1250	宇治拾遺物語(このころ)
1255	*承久の乱
1260	*建武中興、浄土真宗を広める
1265	*建武中興、浄土真宗を広める
1270	建礼門院石見大夫集(このころ)
1275	百人一首、新撰撰集(藤原定家)
1280	保元物語、十三世紀半ばごろま
1285	平治物語、でに原野成立
1290	十訓抄
1295	*日蓮、法華宗を開く
1300	古今著聞集(藤原朝経)
1305	*文永の役(元寇の開始)
1310	*二編、時宗を聞く
1315	十六夜日記(阿仏尼、このころ)
1320	*弘安の役(元寇の終了)
1325	抄(石見(無住))
1330	歌集抄(このころ)

中世の文学「概観」

時代区分・背景

源朝が鎌倉に幕府を開設し、征夷大将軍となった建久三年(一二九二)年(〇〇)ころまでの、およそ四百年間を中世と呼ぶ。鎌倉、南北朝、室町、安土・桃山時代と細分化されるが、大きな流れとしては、貴族階級の没落と、それにかわる武士階級の台頭、庶民社会の成長を指摘することができる。文化史的にいえば、王朝的な美と、粗野で卑俗で野性的といわれてきた地方的、民衆的なものとの対立・融合がさまざまな面で見られ、中世という時代が、大きな転換期であったことを如実に示している。

王朝文化への憧憬

貴族階級は無力化する一方であったが、王朝文化への思想とあこがれには強いものがあつた。「新古今和歌集」は王朝和歌の輝きを飾るものであつたが、その後も、和歌の伝統は、ほぼ中世全般を通じて守り続けられた。「建礼門院石見大夫集」や「とはすがたり」のように、官廷を舞台とした女房日記もつづられ、平安時代の物語を模倣した擬古物語も多く作られた。世阿弥に代表される能の達成した幻想的な幽安の世界も、王朝美へのあこがれのひとつといえるのである。

思想・美意識の深化

源平の争いから戦国の世まで、うち続く内乱と下剋上の世相は、人々に現実社会への批判と過去の歴史への関心を高めさせた。「平家物語」や「太平記」など多数の軍記物語が作られた。「愚管抄」や「神皇正統記」など歴史論にふれる文学も登場してきた。不安な日常生活は極楽浄土への希求をつのらせ、新しい仏教の誕生をうながし、法語という宗教文学の成立を見た。

一方、出家遁世(遁世)という形で現実社会を拒否、離脱した人々も多く、隠遁と求道(求道)を主題とした仏教説話集は、くり返し著述された。また、「方丈記」や「徒然草」のように、隠遁生活の感慨をこめて書かれた。それらは、無常観を基調として、移りゆくもの、滅びゆくもの、無常の美ともいえるべき新しい美意識を提唱している点は注目すべきことで、中世文学の大きな特色といえる。歌論や能楽論など理論的な色彩の強い著述がなされたのも、これらの風潮と無関係ではない。

文芸の地方化・庶民化

発展しつつあつた地方社会や民衆社会の様相は、新鮮な印象をもつて、「宇治拾遺物語」などの説話文学の世界に取り上げられた。鎌倉など地方都市との往反も増加し、「海道記」「東国紀行」など旅を素材とした紀行文学もつづられるようになった。また、戦乱を避けて地方に下向した京都の貴族、あるいは各地の戦国大名に招かれた宗師ら運歌師たちも、地方の文化水準の向上に、大きな役割を果たしたと考えられる。文学の題材・制作・享受などすべての面で、京都から地方へと大きな広がりを見せたことは、この時代の大きな特徴といえることができる。

和歌の余技として始まった運歌は、庶民の間でも流行し、田舎や猿蓑、狂言の見物のかたわらで上下を問わず行われていたらしい。もとは民衆の芸能であつた能狂言が、貴族や武将たちの間で愛好されたことは重要である。庶民階級にまで広がつた談者層を対象に作られたのが御座子であり、小歌の世界には、庶民社会の息吹が生かまきと伝えられている。このように、文学・芸能の成立や受容の場に、庶民階級が大きな影響力をもつに至つたことは注目され、このことはやがて、次の近世の庶民文学の隆盛へとつながっていくものであつた。

語り手の影響

「平家物語」は語り手に合わせて語られていた。「曾我物語」「義経記」にも、語られていたことの痕跡がうかがえる。文字が「語り」という形を通して享受されたことはこの時代の特色で、詞章の面ではもちろんのこと、内容的にも、聴衆の好みを反映するなど深い影響を受けていたと考えられる。庶民の中で舞われ、語られていた幸若舞や説話節の「語り」は、近世の浄瑠璃の源流となつた。

年代	主要作品・できごと*
1000	玉葉集(藤原公家)
1010	とはすがたり(このころ)
1015	徒然草(兼好、このころ)
1020	*鎌倉幕府成立
1025	*建武中興
1030	*南北朝時代の開始
1035	*室町幕府成立
1040	神皇正統記(北畠親房)
1045	風雅集(元成院)
1050	英欽堂集(二条良基)
1055	太平記(このころ)
1060	増訂(このころ) 狂言
1065	*南北朝の合
1070	*全開(室町幕府)
1075	風姿花伝(世阿弥、このころ)
1080	中興談(世阿弥)
1085	ささめ(心歌)
1090	*必死の風、始まる
1095	水無瀬三郎百韻(宗重)
1100	*源朝明(東山文化)
1105	新撰撰集(藤原定家)
1110	山崎宗室(このころ)
1115	守武子(元水田守武)
1120	*キリノスツ(藤原)
1125	*室町幕府成立
1130	伊賀物語(大森)
1135	*開ヶ原の戦

和歌・連歌

和歌

平安時代末に藤原俊成(942)によって主導された新しい和歌への動きは、その子の藤原定家、あるいは藤原家隆ら新進歌人に継承され、発展していく。わが国最初の武家政権である鎌倉幕府に強い対抗意識をもっていた後鳥羽院は、京都朝廷の象徴として、伝統的な貴族文化である和歌を積極的に推進した。正治二年(1132)の百首和歌や、史上最大規模の「千五百番歌合」などを開催、みずからも有力な歌人の一人として活躍した。

「新古今和歌集」

源・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅経・寂蓮(後中)撰。元久二年(1125)成立。
 (成立) 建仁元年(1121)七月、和歌所が宮中に設置され、同年十一月、「新古今和歌集」の撰進の命が、後鳥羽院から藤原定家ら六名に下された。後鳥羽院は、撰者たちが選んだ歌を自ら精選し、完成後も削除・追加を指示するなど、実質的には後鳥羽院の親撰、強い監修のもとに成立したといつてよい。八代集の最後。

〈内容・歌人〉二十巻、約二千首から成り、西行(942)の九十四首を最高に、後鳥羽院や撰者たちのほか、慈円・藤原良経・藤原俊成・式子内親王・俊成女・宮内朝など、新古今時代の当代歌人が主流を占める。



後鳥羽院(新三十六歌仙図帖)

〈歌風〉初句切れ・三句切れ・体言止めなどの手法を多用し、言葉の呼び起こす美しいイメージや余情を最大限に發揮させようとした。また、本歌取りとか、「伊勢物語」や「源氏物語」の世界をふまえた歌などが多く、象徴的・情趣的・唯美的な和歌を数多く残した。新古今調とも呼ばれるこの歌風は、「古今集」以来の王朝の美の極致ともいえるもので、以後の文学に大きな影響を与えた。



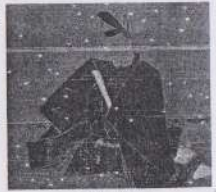
「新古今集」(為相本)

2

「新古今集」から

- ① 見わたせば山もとくすむ水無瀬川夕たは秋となに思ひけむ (後鳥羽院・春上)
- ② 春の夜の夢の浮橋とだえして夢にわかるる横雲の空 (藤原定家・春上)
- ③ 志賀の浦や遠きかりゆく波間よりこぼりて出づる有明の月 (藤原家隆・冬)
- ④ 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする (式子内親王・恋)

〔口語訳〕① 見渡すと山の影は霞んで水無瀬川の眺めは実に美しい。夕方の景色は秋に限ると、今までぞ思っていたのだらう。
 ② 春の夜のあのひとの甘き夢は覚わってしまった。夜明けの方では、男女が別れぬように橋が壊れて立直り別れていく。
 ③ 志賀の浦の志賀の浦では岸辺から湧き出た波が次第に遠ざかり、その波の間から水のように芽えた有明の月が出ることだ。
 ④ 私の命よ、絶えぬなら絶えてしまえ。このまま生き水らえと(恋心が)ついでに耐え忍ぶ心も弱ってしまうから。



藤原定家

▼藤原定家 応保二年(1131)仁治二年(1131)藤原俊成の子で、新古今時代を代表する歌人。「伊勢物語」「源氏物語」「更日記」などの古典研究にも力を注ぐ。「新古今集」「新古今和歌集」の撰者。家集「拾遺集」「定家集」。「源氏物語」「源氏物語」の撰者。家集「拾遺集」「定家集」。「源氏物語」「源氏物語」の撰者。家集「拾遺集」「定家集」。

▼歌風 初句切れ・三句切れ・体言止めなどの手法を多用し、言葉の呼び起こす美しいイメージや余情を最大限に發揮させようとした。また、本歌取りとか、「伊勢物語」や「源氏物語」の世界をふまえた歌などが多く、象徴的・情趣的・唯美的な和歌を数多く残した。新古今調とも呼ばれるこの歌風は、「古今集」以来の王朝の美の極致ともいえるもので、以後の文学に大きな影響を与えた。

語注

*本歌取り 有名な古歌や物語の言葉や句を取り入れて、和歌に重層的な構造をもたせる手法。上段の和歌の歌(①)の本歌は、夜ふくるままに打や水らちも遠ざかりゆく志賀の浦 (後鳥羽院)。
 *妖艶 美しいものとは思えないような華やかな美しさ。*有心 艶美な情態を心に深くこらすこと。また、それによってかもし出される美しさ。

『百人一首』

藤原定家撰か。嘉禎元年(三三三)以後成立か。

藤原定家が撰んだ『百人秀歌』をもとにしてできたと考えられ、『古今集』から『続後撰集』までの勅撰集の中から、天智天皇に始まり順徳院に至るまでの百人の歌を一首ずつ収めている。王朝和歌の秀歌を選び集めたもので、以後、和歌の世界はもとより、広く文芸の世界にまでその影響は及んでいる。江戸時代初めごろから、歌がたとしても広く民間に普及した。



定家筆「小倉色紙」

『金槐和歌集』

源実朝作。建暦三年(三三三)ごろ成立。

鎌倉の第三代将軍源実朝は、北条氏の執権によって、政治の面からは遠ざけられていたが、京文化に強い関心をもっていた。藤原定家から歌論書『近代秀歌』を送られるなどして教えを受け、短命な悲劇的生涯の中で、京都から遠い関東の土地にあって、新古今調、やがて力強い万葉調のすくれた歌を残した。その家集『金槐和歌集』の歌は、正岡子規・斎藤茂吉などに高く評価された。

『金槐集』から

箱根の山をうち出でて見れば波の寄る小島あり。俣の者、「この海の名は知るや」とたづねしかば、「伊豆の海と申す」と答へ侍りしを聞きて、

〔口語訳〕箱根の山を越えて見ると波の打ち寄せる小島がある。俣の者に、「この海の名は知っているか」と尋ねたところ、伊豆の海と申す」と答へましたのち聞いて、箱根の山路を私が越えてくると、目の前に広い伊豆の海が開け、その海の方の小島に、白い

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

波が打ち寄せているのが見えることだ。

●十三代集『新古今集』の成立後、歌壇活動は低下していく。藤原定家によつて『新勅撰和歌集』が撰ばれるが、『新古今集』の唯美的で妖艶な歌風とは違って、平淡・典雅な歌風を示し、これが以後の勅撰集の基本的方向となった。

『新勅撰集』から

- ① 風そよぐならの小川の夕暮れはみぞぞ夏ものしるしなりける (藤原家隆・夏)
- ② 来ぬ人をまつほの浦の夕なさに焼くぞ森の身もこがれつつ (藤原定家・恋)

〔口語訳〕① 風がそよぐと小川の夕暮れに吹くならの小川の夕暮れは涼しくて秋の訪れを思わせるが、ただ夏である証憑なのだ。行事だけが、まだ夏である証憑なのだ。② 来ぬ人を持つ私は、松の浦の夕なき時に焼く森が焦げるように、その人を見て身も焦りこがれているのです。

藤原定家の後、歌壇は定家の子藤原為家によつて引きつがれたが、為家の死後は、その子為氏(一条家)・為教(京極家)・為相(冷泉家)が対立し、三家に分かれる。折しも皇室の持明院統と太皇太后の対立もからまり合い、競うように勅撰集が作り出された。

『新勅撰集』の歌風を理想とする二条派の撰んだ勅撰集は、概して伝統的で温雅な歌風を主流とするが、革新的な歌風を追求した京極為兼らの京極派が中心となって撰んだ『玉葉和歌集』と『風雅和歌集』は、自然観照に徹した清新な叙景歌に特色が見られる。こうして、南北朝時代を経て室町前期に至るまでに、八代集(仁徳)のあとに続く十三代集が成立した。

▼万葉集・古今集・新古今集の比較

巻数	二十巻	二十巻	二十巻
歌数	約四千五百首	約千五百首	約二千首
成立	奈良時代末	延喜五(九〇五)	元久二(二三三)
撰者	大伴家持が中心	紀友房、紀實之、凡、藤原家隆ら	藤原定家、藤原家隆ら
主な歌人	額田王、柿本人麻呂、山部赤人	のほか、在原行平、伊勢、後鳥羽院	撰者のほか、西行、藤原、後鳥羽院
語調	五七調、二句、四句切れ	七五調、三句切れ	七五調、初句、三句切れ
修辭	枕詞、序詞	掛詞、縁語、比喩	本歌取り、体言止め
歌風	素材、雄大、ますらをり	優美、理知的、なをやめをり	情緒的、幽玄、有心

▼『百人秀歌』藤原定家が、子の為家の別である兼生(菅原朝朝)から贈られた箱根山にある別荘の障子にはる色紙形和歌(歌を書いた色紙)を依頼され、嘉禎元年(三三三)に撰んだもの。『百人一首』とはほとんど一致し、その思想とされる。

▼源実朝(建久三年(一一九二)承久元年(三三三))右大臣行實の弟、鎌倉幕府第三代将軍。歌人。右大臣行實の弟、前關八人朝野で勤の公卿に贈役された。

▼十三代集一覽表(歌数はすべて二十首)

集名	成立	撰者
新勅撰	建暦二(三三三)	藤原定家
新古今	文永二(一一三三)	藤原為家
新後撰	嘉元元(一一三三)	藤原為家、基家ほか
五葉	正和元(一一三三)	藤原為家
統後拾遺	元治二(一一三三)	二条為世
風雅	貞和五(一一三三)	二条為定
新拾遺	貞治四(一一三三)	二条為定
新後拾遺	至徳元(一一三三)	二条為明、頼朝
新統古今	水亨十(一一三三)	二条為成、二条為重、飛鳥井雅世

(八代集)仁徳(仁徳)と十三代集をあわせて(二十一代集)という。

▼藤原為家 建久九年(一一九二)建治元年(三三三)定家の子、『統後撰集』の撰者。

〔語注〕*持明院統と太皇太后統、後醍醐天皇の皇統と龜山天皇の皇統、十三世紀の後半から皇位継承をめぐる内統の争い(起り、この対立は、以後、南北朝の内乱にまで持ちこされた。

『玉葉集』「風雅集」から
 ① 枝にもる朝日の影の少なきに涼しき深き
 竹の奥かな (原集巻一・玉葉集・夏)
 ② 花の上にはしうつろふ夕づく日入ると
 もなしに影消えにけり
 (水指門院・風雅集・春中)

〔口語訳〕① (竹林)に枝をもちてさしこち朝
 日の光が少なくて、林の奥の方は、いかにも
 涼しうに見えることだ。
 ② 夕日の間々しい光が、庭の花にしばらくの
 間映じていたが、その光も、いつの間にか
 夕日が沈んだというこもなしに消えてしま
 ったことだ。

●南北朝・室町時代の和歌 南北朝時代の二条派歌人として、朝阿や「徒然草」の作者兼好らが知られている。また、宗良親王の撰になる『新葉和歌集』(三三九)は、南朝の人々の悲哀が実感をこめて歌われている歌集である。室町時代になると、最後の勅撰集『新編古今和歌集』が編まれるが、和歌は貴族よりも武家・僧侶のものとなり、冷泉派の武將歌人今川了俊とその門下の正徹らが活躍した。正徹は藤原定家を強く意識し、余情・妖艶の新古今調への復帰を主張した。しかし、古今伝授のように、和歌はしだいに形式を偏重するようになり、やがて衰退していった。

●歌論 和歌の隆盛は、歌人や和歌への批評意識を高めることになった。また、詠作上の心得や技法などについても、しだいに取り決めができてきた。歌論書という形でまとめられるようになった。鴨長明の『無名抄』、藤原定家の『近代秀歌』、『毎月抄』、後鳥羽院の『後鳥羽院御口伝』などが注目される。

『後鳥羽院御口伝』後成・西行の評
 歌阿はやさしく腕に心も深く、あはれなる
 ところもありき。殊に恩意に庶幾する姿なり。

〔口語訳〕 朝阿(後成の法名)は優美・優麗で感
 興も深く、情態をしみじみと感させるところ
 があつた。特に私自身(筆者)の理想とする歌の
 興も深く、情態をしみじみと感させるところ
 があつた。特に私自身(筆者)の理想とする歌の
 興も深く、情態をしみじみと感させるところ
 があつた。特に私自身(筆者)の理想とする歌の

西行は面白くて、しかも心も殊に深く、あり
 がたくいできがたき方も共に相兼ねて見ゆ。
 も特に深く、たいへん珍重されるべきものだ
 し、また簡単にできるものとはとても思われな
 い。天性からの歌人と思われ。

連歌

連歌は、和歌の上の句五七五と下の句七七を別の人が詠み、その唱和のしかた(付け合い)を楽しむ文芸であった。すでに『万葉集』にその例があり、『金葉集』(一一二七・D1)において勅撰集としては初めて「連歌」の部が設けられるようになった。これらは五七五と七七の二句から成る短連歌であったが、平安時代末期になると、五七五・七七・五七五・七七……と数句以上、鎖のように続ける長連歌(鎖連歌)が作られるようになった。

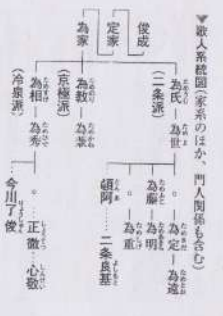
無心連歌と有心連歌

鎌倉時代になると、和歌の余技・余興として藤原定家など『新古今集』の撰者たちも連歌を愛好し、連歌会が後鳥羽院の御所などで開かれるようになった。滑稽を主とする無心連歌(栗本連歌)と和歌の情趣を詠む有心連歌(柿本連歌)とに分かれていたが、堂上貴族の間では、しだいに有心連歌が中心になっていった。

鎌倉後期には地下の武士、僧侶、一般庶民の間にも広まり、桜の花の下に寄り合い、田楽・猿楽(口・口)を楽しみ、連歌を行うという庶民の遊戯・娯楽の一つとして大いに発展



歌会のようなす(葛城絵詞)



▼室町時代 建長六年(一一三六)元弘二年(一一三三)木下納言・京極派の代表歌人で、『玉葉集』などの撰進に中心的な役割を果たした。清新で自由な歌風で、その主張は、歌論書『為家御抄』に見られる。持明院の伏見院、花園院に親近したが、政治的野望により任職・土佐に配流された。

▼室町時代 正徳二年(一一三六)安永五年(一一三九)一条派歌人・兼好・清弁・隆盛とともに、二条派の和歌四天王といわれる。家集『草庵集』がある。

▼室町時代 宗良親王(一一三六)長祿元年(一一三九)後醍醐天皇の皇子。南朝歌壇の指導者であった。家集『春在集』がある。

▼今川了俊 嘉祥元年(一一三六)必承二十一年(一一四四)足利和歌の重臣。冷泉派の歌人。連歌を二条良基に師事した。

▼正徹 弘和元年(一一三九)長祿三年(一一三九)冷泉派の歌人。家集『草庵集』、歌論書『正徹物語』。

▼『無名抄』 鴨長明作。建長元年(一一三三)ころ成立。歌人全和歌にまつわる語を多く載せている。

▼『近代秀歌』 藤原定家作。承元二年(一一三二)成立。源実朝に書き送ったもの。

▼『毎月抄』 藤原定家作。承久元年(一一三三)成立。「有心体」を歌の理想とする考えを示している。

▼『後鳥羽院御口伝』 嘉祥元年(一一三六)ころ成る。歌人たちの批評に説くものがある。

▼『五歌波集』の書名の由来
 『古事記』の中で、倭建命と御火焼翁との唱和で、五歌波を過ぎた後夜が寝つる。命かかると夜には九夜。日には十日を。命とある。これは古く連歌の起源とも考えられ、ここに「五波」とあることから、連歌を「つづばの波」と呼ぶようになった。

〔語注〕 *古今伝授 『古今集』の解説部分の解説に伝えたのが初めといわれる。
 *堂上貴族 『堂上』は昇殿を許された五位以上の貴族のこと。*地下 『じげ』と読む。昇殿を許されない官人の意から、一般庶民のこと。

し、花の下連歌と呼ばれた。

【英玖波集】 二条良基撰。延元元年(三三三)二年(三三六)成立。

南北朝期に入ると、連歌はますます盛んになった。二条良基は、関白・摂政を歴任した最高の貴族であったが、無類の連歌好きで、地下連歌師政治を師とし、その協力のもとに、最初の連歌撰集『英玖波集』を編纂する。これが勅撰集に準じられ、連歌は和歌と並ぶ文芸としての地位を確立するに至った。

良基はさらに、『連歌新式(応安新式)』(三三三)を制定し、連歌の規則を定め、連歌論集『筑波問答』(三三三)などを著した。しかし後年、良基は討軍足利義満、五山文学の学僧義堂周信・絶海中津などとしばしば和漢論争を行うようになり、漢詩文の影響を受けるなど、一般の地下連歌から離れる傾向が出てきた。

●連歌の完成 室町時代に入ると、梵灯庵主、その弟子の宗阿、さらには専順・心敬などすぐれた連歌作家があらわれる。心敬は、歌人正徹に長く師事し、『艶』『ひえ』『さび』といった理念を追求し、その著書『ささめこと』(三三六)や『ひとりごと』『老のくりごと』などの中ですぐれた芸術論を述べている。

心敬の芸術論 昔、歌仙にある人の、歌をばいかやうに誦むべきと尋ねれば、枯れ野のすすき、有明の月と暮へ侍り。これは言はぬ所に心をかけ、冷え寂びたるかたを悟り知れとなり。(『ささめこと』から)

【水無瀬三吟百韻】 宗阿・肖柏・宗長作。長享二年(四八〇)成立。

心敬らのおとをうけて、連歌を完成させたのが宗阿である。宗阿は『幽玄・有心』を理想とし、高弟の肖柏・宗長と行った『水無瀬三吟百韻』はその代表作で、連歌百韻(百句から)の最高の傑作とされる。



水無瀬三吟百韻 宗阿・肖柏・宗長作。長享二年(四八〇)成立。

【水無瀬三吟百韻】から(表八句)
雪ながら山もとがすむ夕べかな 宗阿(発句)
行く水とほく梅にほふ里 肖柏(脇句)
川風に一むら柳春見えて 宗長(第三句)
舟さす音もしるさあけ方 柏(第四句)
月やなほ霧わたる夜に残らん 柏(第五句)
霜おく野原秋は暮れけり 長(第六句)
なく虫の心ともなく草かれて 柏(第七句)
垣根をとへばあらはなる道 柏(第八句)

●俳諧連歌 俳諧とは「おどけ」「たわむれ」を意味する言葉で、連歌会のあるの気楽な余興として俳諧の連歌が楽しまれていた。鎌倉時代の無心連歌の流れをくむものである。宗阿以後の純正連歌が規則にしばられ形式化することによって、庶民の笑いや機知を反映した俳諧連歌が流行してきた。最初の俳諧連歌集『竹馬狂吟集』(四九九)、山崎宗鑑の『犬筑波集』(五三三)、荒木田守武の『守武千句』(五四〇)などが有名で、それらはやがて近世の俳諧へとつながっていくことになる。

▼二条良基 元応二年(三三三)～享徳二年(三六〇)。北朝の最高の貴族。博学多才な人で、歌人、連歌作者、『増補』(三三六)の作者ともいわれる。

▼宗阿 弘安五年(一一二二)～永享二年(三三六)。連歌師。二条良基・義満、弟子の醍醐の三人で、連歌道三賢といわれる。

▼五山文学 鎌倉時代末から室町時代を通じて、京都・鎌倉の五山の禅寺を中心として起こった漢文・漢詩・漢語の文学。絶海中津のほか、一山・一寂・虎阿闍梨・夢窓疎石・中興円月らがいる。

▼心敬 応永十三年(一四二六)～文明七年(一四五〇)。大物部。歌人、連歌作者。和歌、連歌、仏教、如親を主唱した。晩年には、弟の乱を避けて開原に下り根柢山・神奈川恩天山で没する。

▼宗阿 連歌を宗阿・心敬・専順に学び、和歌、古典を飛鳥井重親・一条教長に学び、

肖柏から俳諧を学べる。明徳四年(一三三三)連歌集『英玖波集』を撰び、勅撰集に準じられた。西行を敬慕して諸国を遍歴、船橋湯本で客死した。西行、芭蕉とともに歌仙の詩人といわれる。『古今集』『源氏物語』などの古典にも深い教養をもつ。越後の上杉氏、山口の大内氏など京都の文化にあこがれる地方大名を訪れて連歌を指導し、古典の講読を行った。連歌撰集『竹林抄』、連歌論書『吾妻問答』などがある。

▼肖柏 嘉吉三年(一三三三)～永享七年(三三六)。中興連歌の祖。二条西実降らと親しく、俳諧に在り、和歌、連歌を指導した。

▼宗長 文安五年(一四四八)～享徳五年(三三六)。連歌師。今川義忠に仕え、のち一休宗純に参拜。日記『宗長手記』(宗長日記)がある。

▼山崎宗鑑 ？～天文八年(一五三九)以降。連歌・俳諧師。守武とともに俳諧連歌の祖。『犬筑波集』(俳諧連歌抄)、『新撰犬筑波集』(俳諧連歌抄)の撰者。『竹馬狂吟集』(四九九)、『守武千句』(五四〇)、『天文五年(三三三)～天文八年(三三六)』の撰者。『守武千句』(五四〇)の作者。伊勢神宮の神官であった。

【語注】 *和連歌句：連歌の発句に漢詩の一句を付け、和句、漢句を交互に連立ていくもの。*純正連歌：俳諧の連歌に対する言葉で、単俳をさらい、芸術的志向をもった連歌。

物語・説話

物語

過ぎ去りつつあった王朝社会をあこがれ、なつかしむ気持ちは強く、鎌倉時代に入ってから、宮廷社会の恋愛を題材とした物語が数多く作られたが、そのほとんどが『源氏物語』などの模倣の域にとどまっていた。擬古物語といわれるこれらの物語にかわって、戦乱と変動を続ける時代・人間を主題とした軍記(戦記)物語・歴史物語などが登場してくる。

【擬古物語】鎌倉初期の物語評論『無名草子』や『風葉和歌集』には多数の作品の名が見られるが、現存するものはわずかである。現存する中では、『松浦宮物語』『住吉物語』『今とりかへばや』『石清水物語』などが、舞台・題材・趣向に工夫を見せている。

【軍記物語】平安時代後半に書かれた『将門記』『陸奥話記』は、漢文体で記録性の強いものであるが、素材と文体に新しい魅力があり、軍記物語の先駆とされる。

●『保元物語』・『平治物語』 鎌倉時代に入ると、平安末期に起こった保元の乱・平治の乱に取材した『保元物語』『平治物語』が作られる。二つの乱の勝敗を左右したのは、新興の武士階級の武力で、それは新たな武士の時代の到来を意味していた。『保元物語』では、雄々しく奮戦する敗軍の勇将源為朝。『平治物語』では、敗死した源義朝の愛人常盤とその子たちの苦難に満ちた逃避行の物語などが、印象深く描かれている。



琵琶法師(職人尺歌合)

▼軍記物語の流れ

安	得門記(西暦年以後) 軍記物語の先駆 陸奥話記(西暦年)
平	保元物語(三世紀半ばごろ) 平治物語(三世紀半ばごろ)
鎌	源平盛衰記(三世紀末ごろ、平家との異名) 源平盛衰記(三世紀末ごろ)
室	大平記(三世紀半ばごろ) 義経記(三世紀半ばごろ) 曾我物語(三世紀半ばごろまで)

▼『保元物語』 藤原俊成、女の作とも伝えられるが、不明。建仁元年(一一一〇)ごろまでに成立か。物語・女流歌人・作家についての評論・批評を載せている。

▼『平治物語』 藤原為家か。文永八年(一一三九)成立。物語の中の和歌を選んで編んだ歌集。

▼『源平盛衰記』 藤原定家作か。鎌倉初期成立か。失われた源平将門が唐に渡り、恋愛や戦争を体験

いずれも作者は未詳だが、十三世紀半ばごろには原型が成立したと考えられている。文章は力強い和漢混交文(口語)である。

【保元物語】 卷中・白河殿攻め落とす事
為朝、例の先細さしがつて、まづさきにすすんだる志保見五郎の骨を射切らんとさしあて放ちたり。志保見きつと見て矢に違はんと頭をうちふりたれども、なごかははづるべき。矢陣こそ少しあがりたりけれども、甲の鎧付の板を左より右へ掛につと射ぬかたり。まづ逆さまに落ちければ、手取の与次落ち合ひて、頭かききり、矢をもぬかすして、頭と甲を矢にて仰ひてうちかづきてぞ出で来たる。

【口語訳】 為朝はいつもの先細の矢をつがえて、真っ先に進んで来た志保見五郎の首を射切つてしまおうとねらっている。矢を放った。志保見はさうと見て、矢をよけようと思いを横にふたつが、どうしてはずれることがあろうか。当たり前場所こそ少しにあがったけれども、かぶとの両脇に垂れているしころの板の上から、左から右へかすように、すばと首を射抜かれてしまった。真っ逆さまに馬から落ちると、手取の与次が駆けつけて、首を切り取り、矢も抜かないまま、首と甲を矢を刺さった矢でもって肩にかっぴでやっけてきたのだ。

【平家物語】 作者未詳。十三世紀半ばごろには原型成立か。

【内容】 平家一門は榮華を極め、平清盛は太政大臣にまで栄達するが、専横が激しく、早くも反平家の動きが起ころ。源頼政の決起にうながされた諸国の源氏は、源頼朝・木曾義仲をはじめとして次々に挙兵する。折しも清盛は熱病で病没、義仲の驚異的な進撃の前に、平家は京都を捨てて都落ちする。しかし、



平家物語(源平合戦) 諸行無常、盛者必衰の理を説いた場面部分

▼『源平盛衰記』 藤原定家作か。鎌倉初期成立か。失われた源平将門が唐に渡り、恋愛や戦争を体験する物語。夢幻的で異国趣味にあふれる。

▼『住吉物語』 作者未詳。鎌倉初期までに成立か。源平の追善を述べた源が恋人と出会い、幸福になる。代表的な擬古物語。平安時代に同名の物語があり、現在本はその改作と考えられる。

▼『今とりかへばや』 作者未詳。鎌倉初期までに成立か。男が姫、女が若君として育てられ、成人後に男女にもとるといふ特異な恋愛物語。

▼『石清水物語』 作者未詳。文永八年(一一三九)ごろまでに成立か。軍国武士が関白の影を見せめるかかわり、出家しようという話。武士を主人公とする点は異色。

▼『将門記』 作者未詳。天慶二年(西暦年)平将門の乱後に成立。東国で平将門が乱を起したときの模様を漢文体で記している。

▼『陸奥話記』 作者未詳。康平五年(一一〇〇)ごろ成立。前九年の役(一一〇一)の事を記し、『将門記』とともに、のちの軍記物語の先駆である。

▼参考 『保元』の乱の印象
保元元年七月二日、鳥羽院、ウセサセ給ヒテ後、日本国ノ亂逆トイフコトハオコリテ後、武者ノ世ニナリニケルナリ。(藤門一原抄)

▼『源平盛衰記』 長治元年(一一二〇)・治承四年(一一三六)、平安末期の武將、平治亂での合戦で敗死。歌人として有名な、詞花集以下の物語集に約六十首が入集。家集一冊歌集もある。

横暴な義仲軍は人心を得ることができず、頼朝の代官源義経に敗れ、義仲は討死にする。平家は、一の谷や屋島で義経の天才的な軍略によって大敗し、ついに壇の浦で滅亡する。

このような平家一門の興亡の歴史が語られる中に、清盛の寵愛を失った祇王、高倉天皇の寵を得ながら清盛の圧迫を恐れて陸奥野に隠れた小督、一門の滅亡後、大原に隠棲した建礼門院徳子など、女性たちの哀しい物語も織りこまれていく。仏教的な無常観に基づきながらも、勇壮な台戦場面は迫力をもって描かれ、また、死や別離を前にした人々の心情も、美しく、哀切に物語られている。

成立・文体 原型は十三世紀半ばごろには成立していたらしいが、琵琶法師によって「平曲」(琵琶に合わせて語り)として語られ、多くの語り手・読者の手を経るうちに、改訂・増補がくり返され、成長していったと考えられる。「源平盛衰記」(鎌倉末期)なども、このような過程でできた『平家物語』の異本の一つである。文章は、漢語・和語・仏教語・俗語を自由に取りこんだ和漢混交文(凡P.82)を基調とし、あるいはまた艶麗で叙情的な七五調の韻文調でつづられており、全体として美しく調和し、壮大な物語世界を作り上げている。軍記物語の白眉、



壇の浦合戦(平家物語絵巻)

中世文学の代表的作品で、後世、謡曲・御伽草子・浄瑠璃などに多くの素材を提供している。

【平家物語】 巻一・祇園精舎
祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり。
空しく双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おこれる人も久しからず、只春の夜の夢のごとし。たけき者も速にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

【平家物語】 巻九・木曾の籠城
木曾殿は一騎、栗津の松原へかけ給ふが、正月二十一日、入相はかりの事なるに、薄氷は張つたりけり。深田ありとも知らずして、馬をさつとうち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれともあふれども、打てども打てどもはたらず。今井が行方のおぼつかないに、振りあふぎ給へる内甲も、三浦の石田次郎為久、追つかけてよつびいてひやうふつと射る。痛手なれば、真向を馬の頭にあててうつぶし給へる所に、石田の郎等二人落ち合ふて、つひに木曾殿の頸をば取つてんげり。

【口語訳】(祇園精舎) インドの祇園精舎の無常家の鐘の音は、万物はすべて遷転するという教を響かせる。盛者必衰の床の四隅にあつた双樹の木は白色に衰じて、盛んな者も必ず衰え滅びるときがあるという理法を示す。世勢を語っている人も、その権勢が長続きはしない。それは全く短い春の夜の夢のようなものだ。勇猛な者も結局は滅んでしまう。それは、全く風の前のちりと同じである。

【木曾の籠城】 木曾殿(義仲)はたった一騎、正月二十一日、夕暮れ時のことで薄氷が張つていた。深い田があるとも知らずして、馬をさつとばかり踏みこませたところ、馬の頭も見えなくなつた。あふれどもあふれども打つても打つても馬は動かない。一人で防衛している今井兼平の行方が気になつたので、振り返られたところ、かぶとの内甲も、三浦の石田次郎為久が追いかけて、弓をよくひきしげり、びゅつと射た。致命傷で、かぶとの内甲を馬の頭に押しあてて、うつぶせになられたところに、石田の家来二人が駆けつけて、ついに木曾殿の首を取つてしまったのだ。

▼平家物語 関係年表

保元元年(二)	保元の乱。平清盛、源義朝ら崇徳上皇軍を破る。
平治元年(五)	平治の乱。平清盛ら、源義朝の軍を破る。
仁安二年(七)	清盛、死一位大政大臣になる。
安元三年(七)	安元の大火。
前白河二年(八)	宇治で、源頼政敗死。
福原へ遷都。後鳥羽院誕生。	
源頼朝・木曾義仲率兵。	
清盛、没。このころ大鏡、源平盛衰記、義経の戦記に敗れて敗死。一の谷の戦、屋島の戦。	
四二八	
文治二年(二)	壇の浦の戦。平家滅亡。
後白河法皇、大原親光院に建礼門院を訪ねる。(大原御幸)	
四二八	
建礼門院を訪問する。(大原御幸)	
四二八	
源頼朝、征夷大将軍となる。	
元久二年(三)	
建久二年(三)	
承久二年(三)	
仁治元年(三)	



平清盛(天子摂関御影)『平家物語』前半の中心人物。

【考】『平家物語』の成立
この行長入道(信濃前同行長)、平家物語を作りて、生伝といひける旨目に故へて語らせり。さて山門(比叡山延暦寺)のこととをことにゆゆしく「力入レテ」書付り。九郎判官(義経)の事は詳しく知りて書きのせたり。「中絶」武士の事、弓馬のわざは、生伝、東国(東)の者に、武士に聞ひ問いて書かせり。かの生伝が生まれつきの声、今の源平法皇は学びたるなり。(重好「徒然草」)
木曾義仲の死
木曾と申す武者、死に待りにけり。木曾入は海のかきをしづめかねて死出の山にも入りけるかな。(西行「閑歌集」)

【語注】 無常観 万物は常に変化し、永久不変のものはないという仏教の考え方。とりわけ、人の死、恋人との別離、建物の荒廃などが人々に無常を強く意識させた。

『太平記』 作者未詳。十四世紀半ばごろには原型成立か。

〔内容〕 後醍醐天皇の北条氏討伐の陰謀に始まり、建武新政とその破綻、新田義貞と足利尊氏の対立、南北朝の抗争から足利幕府の成立、そして内紛、將軍義満の執事として細川頼之が入京するところまで終わる。

〔太平記〕 元弘の変、南北朝の内乱を中心に扱う中で、公家・大名・武士・野伏・隠れ者など、複雑な時代相と人間像をリアルにとらえている。

『平家物語』の「盛者必衰」のような統一的な視点は見られないが、政道・世相への批判がなされていることは見落とせない。

『成立・文体』 作者として、小島法師らの名もあるが、多数の人の修補を経て現在の形になったと考えられる。物語僧にも語られ、近世には太平記読みによって講釈された。

文体は、漢文色の濃い和漢混交文で、華麗な道行文は有名である。

『太平記』 巻十六・正成兄弟討死の事

正成座二居ツツ、舎弟ノ正季ニ向テ、「抑、最期ノ一念ニ依テ、善悪ノ生ヲ引トイヘリ。九界ノ間ニ何カ御辺ノ願ナル。」ト問

〔口語訳〕 正成は上座に座つたまま、弟正季に向かつて「さて、臨終の一心によつて来世に善く生まれるか悪く生まれるかは決まると言ひ、九界の間でお前はどこに生まれ変わりたいのか」と尋ねたところ、正季はからからと笑つて

ケレバ、正季カウ「ト打笑テ、七生マデ只何人間ニ生レテ、朝敵ヲ滅サバヤトコソ存候ヘ」ト申ケレバ、正成ヨ三層シゲケル気色ニテ、「罪業深キ悪ナレ共我モ加減ニ思フ也。イザサラバ同ク生テ此本懐ヲ達セン。」ト契テ、兄弟共ニ差進テ、同枕ニ臥ニケリ。

〔太平記〕 巻二・俊基朝臣再び関東下向の事

落花ノ雪ニ踏連フ、片野ノ春ノ桜ガリ、紅葉ノ錦ヲ衣テ履、嵐ノ山ノ秋ノ暮、一夜ヲ明ス程ダニモ、旅後トナレバ、無ニ、恩愛ノ契リ浅カラス、我故郷ノ妻子ヲバ、行末モ知ズ思置、年久モ住訓シ、九重ノ帝ヲバ、今ヲ限ト願テ、思ハヌ旅ニ出玉フ、心ノ中ゾ哀ナル。

〔口語訳〕 雪のように散り乱れた桜の花に、道を踏み迷う交野の春の桜狩りや、錦のように美しい紅葉をかざして帰る嵐山の秋の夕暮れに、たった一夜を明かすのでさえ、旅後となるとつらいのに、情愛浅からぬ故郷の妻子を、行末のこともわからぬまま故郷に残して、長年仕置れた帝都を、今日を最後とがえりながら、思ひがけない旅に出発された心の中は、まことにあわれである。

●『義経記』・『曾我物語』 室町時代には、源義経の悲劇的生涯を扱った『義経記』、曾我兄弟の仇討ちを描いた『曾我物語』が作られた。横死した死者たちへの鎮魂の思いがそこにはこめられており、「判官物」「曾我物」として、後世まで長く語りつがれていった。

『歴史物語』 保元・平治の乱、源平の動乱、承久の乱、元弘の変、南北朝の争乱とうち続く戦乱の中、貴族階級の没落と武士政権の樹立という歴史の大きな転換点は、軍記物語とともに、いくつもの歴史物語・史論書を生んだ。

考 南北朝時代の世相
このころにはやむを得ず、夜討、盗賊、謀略、百官、早馬、虚勢、生類、遊術、自由出家、俄大名、述者、安堵、思貫、文書入れたる組、追討、蔵人、押替、下廻しする成り出者、(二条河原御書から)



太平記読み(入鹿洞家因巻)

▼和漢混交文 かなで書かれた和文体と、漢語や漢文詞法体あるいは俗語などの混じった文。鎌倉期以後の軍記物語や随筆などに多く用いられた。

▼道行文 旅の情景や旅情を韻文調で表現したものの。縁語、序詞、掛詞等の技巧をこらし、通常七五調をとる。



うち続く戦乱(秋夜長物語絵巻)

▼『義経記』 作者未詳。室町時代初めごろに成立か。源義経の幼少期と、平家討伐後の義経の悲運を中心に描く。別名『判官物語』ともいわれる。

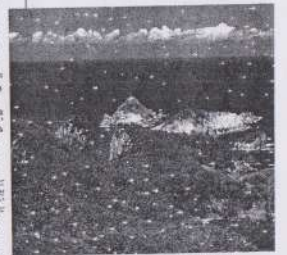
▼『曾我物語』 原形は頼朝の僧のかわりがあったと思われるが、のち増補される。室町初期ごろまでに成立か。曾我十郎・五郎の兄弟が、父の仇・源頼朝を討つ物語。

〔語注〕 *判官物：源義経が検非違使(判官)の職にあったことから、義経に関する物語のことをいう。

●「増鏡」 平安後期の「大鏡」「今鏡」のあとをうけて、鎌倉初期に「水鏡」「六代勝事記」、南北朝には「増鏡」が書かれた。「増鏡」は、優美な擬古文でつづられ、作者の王朝宮廷社会へのあこがれがうかがえる作品で、四鏡(口鏡、水鏡、増鏡、大鏡)のうちでは、「大鏡」に次ぐ佳作である。

「増鏡」第十六・久米のさら山

都の木末を隠るるまで御覧し送るも、なほ夢かとおぼゆ。鳥羽殿におはしましつきて、御よそひ改め、破子など委らせけれど、気色ばかりにてまかつ。これより御裏に奉れば、とどまるべき御前どもの、空しき御車を泣く泣くやり帰るとて、くれまどひたる気色、いと張へがたけなり。

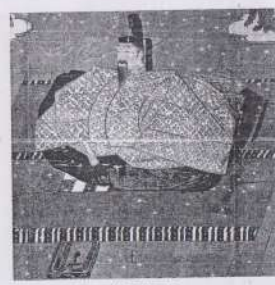


後醍醐天皇の流された隠岐

(口語訳) 隠岐へ配流される後醍醐帝は都の木末が隠れてしまうまで見送られるにつけても、やはり夢かと思われ、鳥羽殿に到着なされて御衣箱を改め、御食事を召し上げるが、ほんの少し口をつけただけで、すぐ出発される。ここからは車でもなく御裏に奉られるので、都に残る御前の者どもは、空車を立ながら引いて帰るといつて、嘆きまどひたる様子は、本当に堪えがたいさまである。

●「愚管抄」・「神皇正統記」 史論書としては、鎌倉初期の「愚管抄」(1190年)、「神皇正統記」(1206年)が有名である。

南北朝の「神皇正統記」(1206年)は、神武天皇から承久年間までの歴史を書き、その歴史を導く「道理」というものを指摘、天皇・摂関・幕府の協調を説いている。北畠親房の「神皇正統記」は、神代から後村上天皇までの治績を記し、南朝の正統性を強く主張している。その独自の史観は、後代に大きな影響を与えた。



後醍醐天皇

▼「水鏡」 作者未詳、鎌倉初期成立か。「大鏡」以前の神代からの歴史を扱っている。
▼「六代勝事記」 作者未詳、貞久(三三)以後成立か。高倉帝から後醍醐帝まで六代の歴史を取りあげる。「平家物語」に影響を与えた点も重要である。
▼「増鏡」 二条良基作か。天授二年(三三)以前に成立。後鳥羽帝から後醍醐帝の隠岐流亡までを描く。四鏡の最後。

説話

前代の安定した政治と文化の伝統への関心は、なお強いものがあり、貴族社会にまつわる話は、意欲的に記録された。しかし

一方、新時代の到来は、地方や庶民の世界の話に新鮮な興味を呼びおこした。仏教信仰も高まりを見せて、数々の遁世者・高僧たちの逸話、神仏の靈験などが熱心に書きとめられ、数多くの仏教説話集が誕生した。

こうして、中世は説話の時代ともいわれるほど多数の説話集が編まれ、さらには素材として、軍記物語・歴史物語・御伽草子・謡曲といった他のジャンルの文芸にも、多く流れこんでいったのである。



説話に登場する庶民(伴大納言絵詞)

「宇治拾遺物語」 作者未詳、承久三年(三三)ころ成立か。

約二百編の長短の説話が平明な和文調で語られている。破戒僧の話、盗賊の話、大力の女の話など世俗の説話、あるいは「こぼり」、博打うちの挿入りなどの民話がかかるが、その自由で軽妙、かつ穏やかな語り口は、深い味わいと内容をもつ。

「宇治大納言物語」(現存しない)や「古事談」などから大きな影響を受けており、平安末期の「今昔物語集」と並んで、説話文学の代表的作品である。

▼国語文学の漢字は世紀

9	日本書紀
10	三宅記
11	法象記
12	江談抄
13	古今物語集
14	古今物語集
15	古今物語集
16	古今物語集
17	古今物語集
18	古今物語集
19	古今物語集
20	古今物語集
21	古今物語集
22	古今物語集
23	古今物語集
24	古今物語集
25	古今物語集
26	古今物語集
27	古今物語集
28	古今物語集
29	古今物語集
30	古今物語集
31	古今物語集
32	古今物語集
33	古今物語集
34	古今物語集
35	古今物語集
36	古今物語集
37	古今物語集
38	古今物語集
39	古今物語集
40	古今物語集
41	古今物語集
42	古今物語集
43	古今物語集
44	古今物語集
45	古今物語集
46	古今物語集
47	古今物語集
48	古今物語集
49	古今物語集
50	古今物語集

▼「宇治大納言物語」 源義経編によるといわれているが、現在は説話、伝わらない。平安時代後期には成立していたと推定され、「今昔物語集」「宇治拾遺物語」などの説話集に大きな影響を与えたと考えられる。
▼「古事談」 源頼朝編、建保三年(三三)以前に成立。貴族社会の秘話や逸話を特色がある。

語注
破戒僧、仏教で禁止されている飲酒、邪淫、殺生などをおこなった僧。

「宇治拾遺物語」大ニ条段に小式部内侍歌をよみかけ奉る事
 是も今は昔、大ニ条段、小式部内侍おぼしけるが、絶え間がちになりけるころ、例ならぬ事おぼしめて、久しうなりてよろしくなり給ひて、上東門院へ参らせ給ひたるに、小式部、台盤所にめたりけるに出でさせ給ひて、「死なんとせしは、など問はざりしぞ」と仰せられて過ぎ給ひける。御直衣の裾を引きとせめつつ申しけり。
 死ぬばかり嘆きにこそは嘆きしかいきて
 問ふべき身にあらねば
 裏へすおぼしけるにや、かき抱きて局へおはしまして、寝させ給ひにけり。

【口語訳】これも今は昔、大ニ条段(一番殿)が、小式部内侍をよみかけ奉る事おぼしけるが、絶え間がちになりけるころ、例ならぬ事おぼしめて、久しうなりてよろしくなり給ひて、上東門院へ参らせ給ひたるに、小式部が台盤所に詰めていたのを見つけて、お寄りになり、「死ぬとせしは、どうして死ななかつたのか」とおっしゃって通り過ぎようとなされた。小式部は教通の御直衣の裾を引きとせめとめて、申し上げたのだ。
 私こそ死ぬほつらい嘆きをくり返していましたが、お助けしてお見舞い上げられるような身分の女ではありませんでしたから。教通は小式部のことをがまんできないほどに思ひ思われたが、抱き上げて彼女の部屋に入り、そのまま寝られたというのだ。

【十訓抄】は、教訓的な目的をもつて作られた説話集で、その名まえのとおり十の教訓の例話を集めている。「古今著聞集」は、平安時代から鎌倉初期の説話を集大成しようとしたもので、『今昔物語集』に次いで大部の説話集である。

● 仏教説話 仏教説話集としては、平康頼の『宝物集』を初めとして、怨念や執着からいかに離れるかに主題をおいた鴨長明の『発心集』、不浄観説話に特異をもつ「閑居友」、西行に仮託された『撰集抄』、巧みな話で民間の教化をはかった無住の『沙石集』などがあげられる。南北朝から室町時代に作られた『神道集』『三國伝記』は、御伽草子とかかわりの深い話を取っている。

● 御伽草子 中世後期になると、擬古物語も衰え、代わって、広がった読者層に向けて読みやすい短編の物語が多く作られるようになった。絵巻物や、冊子形式の奈良絵本の形をとるものも多く、「一寸法師」「物くさ太郎」「文正草子」など庶民の立身出世譚、「鉢かづき」「岩屋の草子」など継子いじめの話、「福富草子」などの笑い話のほか、出家譚・本地物・異類物など内容は幅広く多様である。



【鉢かづき】継母に家を追われ、川に身を投げた娘は、鉢のため身が沈まず、通りかかった漁船に救われる。奈良絵本

前代の物語を簡略に改めたもの、民間説話を物語化したものなどがあり、逸歌・俳諧・能狂言などと同じく、成長しつつある庶民階級の意識を強く反映している。

● キリシタン文学 室町時代末期に渡来した宣教師たちが、布教や日本語学習のためにローマ字で翻訳・著述したもので、「伊曾保物語」「どちりなきりしたん」「日葡辞書」(辞書の辞書)、天章版『平家物語』などがあり、当時の口語を知る上での貴重な資料となっている。

【伊曾保物語】 Aruun xiximurao fucuno carano yararuni sono casano nannende..... (あゝいぬ しむらゝ) 海を、ふくんで、かわを、わたるに、そのかわの、まんなかで.....)

【宇治拾遺物語】 建長四年(一一三二)成立。成季作。建長六年(一一三四)成立。

【十訓抄】 六条左衛門入道(父)に成りて、人間に於て佛法が宝であるということ、例話とともに述べている。

【発心集】 鴨長明作。建保三年(一一三三)成立。立か。発心(道心)のむすかし、愛欲の恐ろしさなどを説く。

【撰集抄】 藤原中興(父)に成りて、立か。発心(道心)を多く説く。

【沙石集】 無住作。弘安六年(一一三三)成立。通俗的な例話をもとに、教訓を巧みに説いている。

● 御伽草子 江戸時代に大抵(大抵)の本屋が二十三日の短編物語を選んで、御伽草子と名づけて売り出したことから、同種の物語の名称となった。

【一寸法師】 身長一寸の男の子が鬼退治をし、打ち出の小槌によって身長も伸び出世する話(物くさ太郎) 継子いじめの男が京に上り、立身出世する物語。

【文正草子】 堀焼きの文正が堀を売って巨万の富をたくわえ、出世した物語。

【鉢かづき】 継母にいじめられるが、死んだ母のかぶせた鉢のおかげで最後には幸福な結婚をする娘の物語。

【岩屋の草子】 継母によって、岩穴に捨てられた娘が、海士夫婦に助けられ、のち開田家の嫁となる物語。故郷が得意で富み栄えた老人と、それをまねして失敗した老人の話。

● 伊曾保物語 文禄二年(一一五三)成立。イツワップ(口語)のローマ字での和訳本。近世の仮名草子のもの(ローマ字)と区別して天章版『伊曾保物語』という、「イツボのハブラス」も。

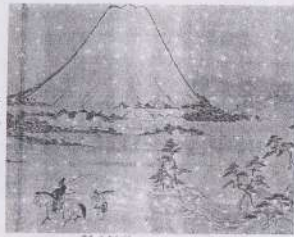
【語注】 *不浄観：人体・食物などが醜態でけがれていること。 *さくらんぼ： *奈良絵本：素材を四角形で、美しく彩色された木製板を持つた本。 *本地物：仏・菩薩が物となって現れる(本地垂迹思想)までの由来話。 *異類物：動物植物が擬人化され、登場してくる物語。

◎ 日記・随筆

日記・紀行

王朝時代の再来を思わせるような平家時代の文化や、政治的には無力化しつつあったとはいえ、伝統的な宮廷文化への思慕と回顧の気持ちは強く、いくつかの回想的日記がつづられた。新しい政治都市鎌倉の誕生によって、東海道は整備され、京と鎌倉の往復の旅を素材とした日記や紀行文学が成立した。

●「建礼門院右京大夫集」 宮廷生活を回想する歌日記的な作品で、天福元年(一一三三)ころの成立と考えられる。作者の建礼門院徳子に宮廷女房として出仕、まもなく藤原隆信や平資盛との間で恋愛関係におちいるが、思うようにならぬまま隆信とは離別。資盛も平家一門とともに都落ちし、やがて壇の浦に沈む。一人残された彼女は、亡き資盛への追慕と哀悼に後半生をささげる。戦乱にもあそばされた女性の悲哀が切々と語られており、情感あふれる作品となっている。



東海道・駿河蒲原郡付近(一葉上人絵伝)



破光院 平家滅亡後、建礼門院徳子が住んだ。

●「建礼門院右京大夫集」 平安末期・鎌倉初期の人物。平家滅亡後、高倉天皇の御所に仕えた。歌は「新撰撰集」などの動撰集に入集している。

▼「たまきはる」 藤原成成の娘・藤原家の御女。承久元年(一一三三)ころまでに成立。建礼門院(高倉天皇の御女)へ女房として出仕したときの回想的日記。「建礼門院中納言日記」「建礼門院日記」ともいふ。

▼「源家長日記」 源家長作。鎌倉初期に成立。「新古今集」の編纂過程、撰者たちの動向などを記している。

▼「弁内侍日記」 弁内侍・藤原隆信の絶作。弘安元年(一一七〇)以前成立か。後深草天皇の宮中への出仕記録。

▼「中務内侍日記」 中務内侍(藤原経子)作。正徳五年(一一三三)以後成立か。伏見天皇の宮中への出仕記録。

▼「十六夜日記」 阿仏尼作。作者は、藤原為家(家朝の子、凡石丸歌入系統)の後継となるが、為家の没後、先妻の子(為家)と妻子(阿仏尼)との間で所領争いがあり、訴訟のため鎌倉に下向。そのときの日記。弘安三年(一一七二)ころ一部成立か。

▼阿仏尼 承久四年(一一三三)弘安六年(一一七二)、鎌倉中務の女流歌人。「十六夜日記」のほか、紀行「うたたね」、歌謡「一夜の懸」がある。



阿仏尼

▼「海道記」 作者未詳。貞治二年(一一三三)以後成立か。年老いて出家した作者が、京から鎌倉へ下向した旅を記す。旅に出た理由、道中の感慨、旅行中に探めた仏教観などを記している。

▼「東関紀行」 作者未詳。仁治三年(一一三三)以後成立か。京から鎌倉へ下向する道中と、鎌倉滞在中の見聞を記す。

●「建礼門院右京大夫集」 から
恐ろしいものどもも西国にたくさ
下向する。いろいろなうわさを聞くので、どん

【口語訳】
「建礼門院右京大夫集」 から
恐ろしいものどもも西国にたくさ
下向する。いろいろなうわさを聞くので、どん

かと聞けば、いかなることをいつ聞かんと悲しく心憂く、泣く泣く寝たる夢に、常に見まますの直衣姿にて、風のおびたしく吹く所に、いと物思はしげにうちながめてあるてに見え、涙ぐ心にさめたる心地、言ふべきかたなし。ただ今もけにさてもやあるらむと思ひやられて、

波風の荒き騒ぎにただよびてさこそはやす
き空なかるらめ

●その他の日記・紀行 「たまきはる」「平家公達草子」は平家時代の追憶を述べ、「源家長日記」は「新古今集」成立期の記録として重要である。「弁内侍日記」「中務内侍日記」は宮仕への回想であるが、「十六夜日記」や「とはすがたり」が紀行部分をもつことは新しい特徴である。

鎌倉時代初期の「海道記」「東関紀行」は、東海道の情景と旅情を、流麗な和漢混交文(ひびき)で描いた代表的な紀行文学で、「平家物語」などに影響を与えた。

●「とはすがたり」 後深草院二条(入我雅忠の娘)作。正和二年(一一三三)までに成立か。十四歳で後深草院の寵を受けたのに続き、西園寺実兼や性助法親王、龜山院ら貴紳と交渉が重ねられ、そのさまがあらささまに描かれる。しかし、西行にあこがれて後年出家。鎌倉・駿島など各地への修行の旅におもむく。赤裸々な愛欲生活の告白と、修行遍歴の旅の描写に特色が見られる。

「どほすがたり」巻二
 「こはいかにと思ふほどに、「私の御しるべは暗き道に入りても」など仰せられて、泣く泣く抱きつき給ふも、あまりうたてくおほゆれども、人の御ため、こは何事ぞと言ふべき御人柄にもあらねば、忍びつつ、「私の御心の内も」など申せども叶はず。見つる夢の名残もうつともなきほどなるに、「時よくなりぬ」とて伴僧ども参れば、後の方より逃げ知り給ひて、「後夜のはどに今一度、必ず」と仰せありて……」

〔口語訳〕(住持法親王が突然入っていらしたつたのでこれは一体どうしたことが思ふ間もなく、「私のお方によりますと、違えました。たとえ地獄に落ちようとも」などおっしゃりながら、泣きながら私に抱きついてこられるので、あまりにひどいとは思つたけれど、相手のため、これはどうしたことでですかと言えぬ御立場の方でもなかつたので、ひそかに小声で、御心の御心の内がどうなっていますか」など申し上げても一向に許してくれない。今し方の夢も現実とも区別がつかないうちに、一時間参りました」とお付きの僧が知らせにやってきましたので、後ろの戸から逃げたもたらされて、「後夜になったら、もう一度、必ず」とおっしゃられて……)

随筆・法語

争乱や天災など激動する時代にあつて、現実社会に不安を抱き、あるいは不満や批判をもつていた人々は、出家という形で現実社会から離脱して、隱者(隠遁者・世捨て人)となつた。彼らは山里に庵を結び、また諸国を遊行したりして、この世の無常を親じ(口語訳)「無常親」といわれるのがこれであり、鎌倉時代初期の鴨長明の「方丈記」、南北朝時代の兼好の「徒然草」などが有名である。

一方、厭離穢土・欣求淨土を心から願つた宗教家たちの言葉には感銘深いものがあり、それらを著述または口述したものが法語である。多くは平明なかな書きのもので、「假名法語」と呼ばれている。

三大隨筆の比較

子草	枕草子	徒然草	方丈記	草庵	兼好
作者 清少納言	作者 紫式部	作者 鴨長明	作者 鴨長明	作者 兼好	作者 兼好
成立 平安中期(829年ごろ)	成立 平安中期(1000年ごろ)	成立 鎌倉初期(1183年)	成立 鎌倉初期(1183年)	成立 鎌倉末期(1330年ごろ)	成立 鎌倉末期(1330年ごろ)
文体 和文	文体 和文	文体 和漢混交文	文体 和漢混交文	文体 和漢混交文および假古文	文体 和漢混交文および假古文
内容 類聚的草紙・日記的草紙・随想的草紙	内容 類聚的草紙・日記的草紙・随想的草紙	内容 大災や天災、地震など、草庵での閉居生活	内容 大災や天災、地震など、草庵での閉居生活	内容 有職故実関係、自然・事物の変化、人間観察など多方面にわたる	内容 有職故実関係、自然・事物の変化、人間観察など多方面にわたる
特色 「をかし」の理念・王朝美の賛嘆	特色 「をかし」の理念・王朝美の賛嘆	特色 無常への感嘆	特色 無常への感嘆	特色 無常への感嘆	特色 無常への感嘆



鴨長明(伝土佐氏周筆)



日野・方丈石

〔内容〕「ユク河ノ流レハ絶エズシテ、シカモモノノ水ニアラス」という無常観をうたい上げる言葉に始まり、前半では五つの大きな災厄が描かれる。すなわち、京都の三分の一を焼いた安元の大火、治承の旋風、平清盛によつて突如決行された福原(現在の神戸)への遷都、死者四万二千人以上といわれた養和の大飢饉、元暦の大地震などが、きわめて精確に、しかも迫力をもつて語られる。四百年にわたつた平安の都、京都の目の前の崩壊は、作者に深くこの世の無常を感じさせずにはおかなかつた。

五大災厄の描写に続いて、後半では、不運のくり返しであつた生涯を回顧し、むなしい現実社会を捨てて出家、大原にしばらく隠棲の後、日野の外山の方丈の庵に移住したことを述べる。そして、そこでの宗教と和歌、音楽をとりまぜた閑静で安逸な生活のさまが、生き生きと語られる。初めて得られた心のゆとりを長明は述べる。しかし、その直後、閑寂な草庵生活に執着する自分を否定して、この作品は終わつている。



【方丈記】(大福光寺本)

短編ながらも、激動の時代に生きねばならなかつた一知識人の感慨をはつきりと読みとることができる名品である。

〔語注〕
 *厭離穢土(えんりていど) この世を汚れたものとして嫌い離れ、心から欣んで淨土に往生することを願ひ求めること。
 *欣求淨土(きんすじゆど) 浄土(西方の山)の大原とも。当時は隱者たちの隠棲地として有名。現在は京都府左京区に含まれる。
 *日野 京都市伏見区、醍醐寺の南の地域。法界寺がある。
 *方丈 一丈(約三メートル)四方の広さの部屋。「方丈記」の書名はこれによる。

〔表現・文体〕前半で五つの大きな災厄を描いて世の無常を諷嘆し、後半で閑居の生活を賞賛、終末で急激な自己否定という、明確で論理的な構成をもっている。文章も漢文訓読調をまじえ、対句を多用した和漢混交文(『P.82』)で、よく引きしまっており、力強い。論旨も明快であり、とりわけ、五大災厄の描写はリアルで、鮮烈な印象を残すものとなっている。

〔影響〕慶滋保胤(『源氏物語』)の「池亭記」に構想をならべているが、強い無常思想の立場から世俗をのがれた隠者の創作した文学として、典型となった作品であり、中世文学全体に大きな影響を与えた。

〔方丈記〕安元の大火

吹き速く風ニトカク移リユクホドニ、扇ヲヒロケテゴトク未広ニナリス。連キ家ハ種ニムセド、近キアタリハヒタスラ焼テ地ニ吹キツケタリ。空ニハ灰ヲ吹キ立テテレバ、火ノ光ニ映ジテ、アマネク紅ナル中ニ、風ニ基ヘズ、吹キ切ラレタル船、飛ブガ如クシテ、一二町ヲ越エツツ移リユク。

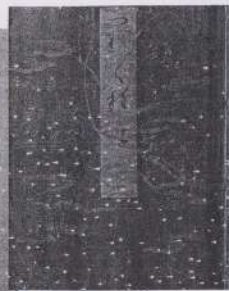
〔口語訳〕あちこちへ吹きつける風にあおられて火が移っていくうちに、扇を広げたような形に火事は広がっていった。火事から近い家は焼にまかれ、近い辺りでは置いた灰が地面にあきつけている。空には灰がまきまきあり、火の光に反射して、空一面が真の赤に見える。強風に吹き飛ばされて、吹き回されてしまった船は、飛んでいくかのように、一、二町先へと飛びこえ飛びこえして移っていく。千段地(河原町)。

〔徒然草〕兼好作。元弘元年(一一三三)ころほぼ成立か。

〔内容〕「つれづれなるままに」序段と執筆動機を語る冒頭に続き、随想風に長短二百四十三段が書きつづられている。その内容は、王朝趣味・有職故実への関心が強く、「何事も古き世のみぞしたはしき」(二三段)のように貴族文化への

尚古的態度が見られるが、同時に、「をりふしの移りかはるこそものごとにあはれなれ」(一九段)のように自然や事物がたえず変化するものと考え、その変化の過程をも注視するのである。

さらには、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」(二三七段)と、移ろいゆく自然の姿にこそ無常の美ともいえるべき新しい美を発見し、「世はさだめなきこそいみじけれ」(七段)とまで言い切るのである。無常は人事にも及ぶもので、死や老いの訪れは不意であり、しかも急速であることを強調する。



〔徒然草〕(正徳本)

「死期はついでを待たず、死は前よりしも来たらず、かねて後ろに迫れり」(二五五段)であるのだから、「人、死を憎まば、生を受すべし」(九三段)と力説する。無常観に立脚して人生への深い省察を述べたものといえよう。

人間観察についても鋭く、「あやまちはやすき所になりて必ず仕る事に候ふ」(二〇九段)のように、複雑で微妙な人間の心理を的確にとらえている。自然や美、社会や人間といった多方面に深く鋭い洞察、柔軟な思考が働いており、味わい深い内容をもっている。

表紙(右)と奥書(下)



い茶は二ノ月八日辰時迄は雨す。水まじりな雨。六月十二日申中日は曇り。雨もあらず。八月廿一日は雨す。清涼なる雨。九月廿一日は雨す。涼やかな雨。十月廿一日は雨す。涼やかな雨。十一月廿一日は雨す。涼やかな雨。十二月廿一日は雨す。涼やかな雨。元弘三年(一一三三)十一月廿一日。兼好作。

長明開元年表(下段のへ)内は想定年輪

久寿(一一三三)	長明、生まれる?	(1)
保元(一一三三)	保元の乱おこる	(2)
平治(一一三六)	平治の乱おこる	(3)
承安(一一三九)	父長頼、没する	(4)
安元(一一三九)	京都大火	(5)
治承(一一三九)	長明、遷居(京都)	(6)
長和(一一四〇)	曾養母ら幸長	(7)
元暦(一一四〇)	長明、大蔵卿	(8)
建久(一一四一)	西行、没(七十三歳)	(9)
建仁(一一四一)	相模、征夷大将軍となる	(10)
元元(一一四二)	長明、和歌所寄人となる	(11)
長明(一一四二)	長明、このころ道世か	(12)
長元(一一四三)	長明、このころ日野に移る	(13)
長治(一一四三)	長明、このころ日野に移る	(14)
長明(一一四三)	長明、没	(15)
建保(一一四三)	長明、没	(16)



安元の大火延焼地図



兼好(藤原光成筆)

兼好 弘安六年(一一二六)ころ撰定三年(一一三三)以後か。俗名部兼好。吉田神社の神官の家系に生まれたが、祖父のころから関東の地と関係が深く、兼好にも少くとも二度の関東下向の体験があった。二十歳前後に堀河家に出仕したが、天皇没後の二十歳前後のときに出家したと推定される。出家後は兼好と号する。
二条為世(四下)の歌人として活躍。頼阿・浄弁・藤原ととも「和歌四天王」といわれた。四十代の終わりころには「徒然草」の主要部がまとめられたと考えられる。歌人、古典学者、有職故実家として足利尊氏・直義・高師直・二条良基らと交流があった。晩年は、和歌守近辺の双が丘に住んだともいわれる。家系に「兼好法師家系」がある。

《表現・文体》全般にわたって平易・簡明で、均整のとれた和文でつづられている。むだのない、抑制のきいた文体は、深い情趣を、あるいは思索を感じとらせる。隨者文学・隨筆文学の代表的作品である。

《枕草子》『方丈記』との比較、影響) 想のおもむくままにつづられる各段は、妙味ある書き方をしており、隨筆文学の特徴をよくあらわしている。「枕草子」(P.59)の手法にならったものではあるが、「枕草子」は王朝美の昏昧が主調であったし、「方丈記」と比べても、無常思想に立脚している点は共通するものの、「方丈記」が無常への詠嘆で終わってしまっているのに対して、「徒然草」の場合、思索的な深まりをもち、無常の美ともいえるべき新しい中世的な美意識を確立している点は、高く評価されるべきである。(三天隨筆の比較 P.90参照)

のちの正徹(P.74)や心敬(P.76)などに大きな影響を与え、また、近世には、処世訓・人生訓の教訓書としても受容されていた。

〔徒然草〕から

① なにがしとかやいひし世捨て人の「この世のはだし持たぬ身に、ただ空の各残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、まことにさも覚えぬべけれ。(一一〇段)

② 老い來たりてはじめて道を行せんと待つことなけれ。古き頃、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病を受け、たちまちこの世を去らんとする時にこそ、はじめて

〔口語訳〕

① 何かといいたる世捨て人が、「この世には何の未練もないこの身にとって、ただの感傷だけは思い切りがたい」と言ったのこそ、実に同感させられる言葉である。

② 老年になつてから初めて道を行きよと時を待つべきではない。若い頃は、多く若い人のものだ。思ひがけず雨に倒れ、たちまちこの世を去つていこうとする時こそ、初めて今までの誤りに気がつくのである。誤りとい

③ 花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものは他なることでもなく、今やだにまじりなくしてはならないことを後回しにして、後回しにしてゆくりすればよしことを急いで行い、過ごしてきたことが後悔されるのである。そのとき、悔やんだとしても意味があるうか人はただ、無常がわが身に迫っていることを心にしっかりととどめて、つかの間も忘れてはならないのだ。(四九段)

④ 桜の花は満開のときに、月の光はささざるものが何もないときばかりを見るべきなのだろうか。晴る雨に向かつて月の姿を恋いしつゝ、家の中に閉じこもつて月の姿を去りつづつあるのを知らないのも、なお趣があり、情け深い。今にも咲きそうなる「花」が散りしおれてしまった庭などにこそ、かえつて見どころは多いのだ。(二二七段)

⑤ 花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものは他なることでもなく、今やだにまじりなくしてはならないことを後回しにして、後回しにしてゆくりすればよしことを急いで行い、過ごしてきたことが後悔されるのである。そのとき、悔やんだとしても意味があるうか人はただ、無常がわが身に迫っていることを心にしっかりととどめて、つかの間も忘れてはならないのだ。(四九段)

⑥ 桜の花は満開のときに、月の光はささざるものが何もないときばかりを見るべきなのだろうか。晴る雨に向かつて月の姿を恋いしつゝ、家の中に閉じこもつて月の姿を去りつづつあるのを知らないのも、なお趣があり、情け深い。今にも咲きそうなる「花」が散りしおれてしまった庭などにこそ、かえつて見どころは多いのだ。(二二七段)

●法語

新仏教の開祖たちの教導の言葉が、問答や談話・消息(風)などの形で多く残されている。それらの中には、悟りのむずかしさ、苦惱・迷いなどについて率直な疑問が示され、また、これらの苦惱や迷いを厳しく凝視する真剣さにあふれている。その弁説の中には、新しい人間観・社会観・宗教観のあらわれを見ることが出来る。



親鸞の生前の姿を最も忠実に写したものとされている。



兼好が晩年住んだといわれる双が丘

Table with 2 columns: Year/Event and Description. Includes entries for 弘安六(一八一八) 兼好、このころ生まれる, 正安三(一〇〇三) 兼好、このころ後二条天皇に蔵人として出仕か, 正和元(一一三〇) 『玉葉集』成立, 二(一一三〇) これ以前に兼好、出家。『とはすがたり』成立か, 元弘元(一一三三) このころ『徒然草』成立、元弘の變(楠木正成ら挙兵), 三(一一三三) 鎌倉幕府滅亡, 建武三(一二三三) 南北朝時代始まる, 應永二(一一三三) 南朝正統説成立, 貞和五(一一三三) 『兼好集』成立, 観応元(一一三三) このころ天平記原型成立か, 三(一一三三) 兼好、このころ没か



第九二段・ある人、弓射ることを習ふに(徒然草頁帖)

法然 長承二年(一一三二)一建暦二年(一一三三)。浄土宗の開祖。専修念仏による極楽往生を説く。
親鸞 承安三年(一一三三)一弘長二年(一一三三)。浄土真宗の開祖。法然門下であるが、絶対他力、悪人正機など法然の思想をさらに押し進めた。
兼好 法然の誘説を弟子の唯円がまとめたもの。鎌倉中期成立。
語注 新仏教・鎌倉時代に新しくおこった浄土宗・浄土真宗・法華宗・日蓮宗、時宗・臨濟宗・曹洞宗などの仏教宗派。

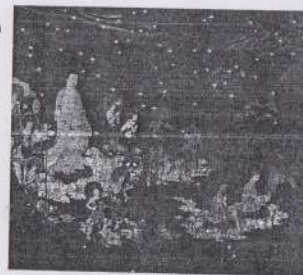
法然の『選択本願念仏集』、親鸞の『教行信証』、『教異抄』、日蓮の『立正安国論』、道元の『正法眼蔵』、『正法眼蔵随聞記』、『一遍上人語録』などが注目される。また、『一言芳談』は、隠遁した聖たち（浄土宗系の念仏者）の名言を書き集めたもので、『徒然草』などに影響を与えた。



諸国回遊の一遍（一遍上人絵伝）

【教異抄】から『悪人正機説』
 善人なほちて往生をとり、悪人や悪人をや。しかるを世の人つねにはく、悪人なほ往生す、いかに況んや善人をやと。この条一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣に背けり。（中略）煩惱具足のわれらはいづれの行にても生死を離るる事あるべからざるを哀れみ給ひて、願をおこし給ふ本意、悪人成仏のためなれば、他方を頼み奉る悪人もつとも往生の正因なり。よりて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと仰せ候ひき。

【口語訳】善人でさえ無業往生ができて、まして悪人の場合は「もちろんのこと」である。ところが世間の人がいちも言うことは、悪人でさえ往生できる、まして善人の場合は「もちろんのこと」と思われるけれど、阿彌陀仏がお誓ひ下さった本願力の徳行とは違っているのである。このでさういふ我らほんたうな修行を積んで生死の迷いの世を離れることは絶対できないというところを阿彌陀仏はお哀れみさして、悪人をたてられたわけで、そのそもその意向は、悪人を往生させるためであって、他に何も頼むことができず阿彌陀仏の御力しか期待できないような悪人こそが、第一の無業往生の対象なのである。だから善人でさえ往生する、ましてや悪人は往生願いしないのだと（親鸞上人）はおっしゃられた。



阿彌陀来迎図

【語注】*悪人正機説：親鸞の唱えた思想で、罪深いおろかな人間こそ、阿彌陀仏が救ってくださるという考え方。

▼日蓮 貞応元年（一一三二）弘安五年（一一二五）、法華宗日蓮宗の開祖。法華経を仏法の根本とする。
 ▼道元 正治二年（一一〇一）建長五年（一一三三）、曹洞宗の開祖。宋西に禅を学び、越前に本願寺を創建した。
 ▼正法眼蔵随聞記 道元の説話を弟子の撰録がまとめたもの。暦仁元年（一一二〇）以前に成立か。
 ▼一遍 延応元年（一一三三）正治二年（一一三二）、時宗の開祖。諸国を遍歴、遊行上人ともいわれ、龍り念仏を広く庶民に勧めた。

芸能・歌謡

芸能

農村で田植えなどのときに農耕儀礼として演じられていた田楽は、平安時代の末になると貴族の間にも広まり、鎌倉・室町時代には、將軍や武將の間で深く愛好された。物まねや曲芸など滑稽さを主とした猿楽（散楽・申楽）も、庶民の間で流行した。田楽・猿楽とも、やがて歌舞を伴う短い対話劇を演じるようになり、田楽の能・猿楽の能と呼ばれるようになった。今日の能の源流で、専門の芸能者たちもあらわれ、座という集団を作り、有力な寺社に所属した。

●観阿弥・世阿弥 この中で、大和猿楽四座のうち、結崎座に出た観阿弥清次は、田楽や近江猿楽の特色を取り入れ、猿楽の能を新しく作りかえて、能の主流となった。その子世阿弥元清は、將軍足利義満に寵愛され、複式夢幻能など優美な歌舞中心の能を作りあげ、能を大成したといわれる。

シテ（主役）、ワキ（脇役）、ツレ（トモ（従者）といわれる能役者たちが、地謡や囃子につれて歌い舞う劇で、『伊勢物語』『源氏物語』『平家物語』な



田楽（浦嶋明神縁起絵巻）



能面「小面」

【語注】*大和猿楽四座 四座（金巻）・結崎（親世）・外山（金生）・坂戸（金剛）の四座。
 *複式夢幻能 貴族のシテが、後場で夢、まぼろしのごとく故人の霊となつてあらわれる場面をもつ能。次ページの「井筒」もこの形式である。
 *地謡 謡曲で、地の文章を大せいりうたうこと。

狂言・柿山伏(シテ・山伏、アド・柿主)
 アド 見はいかん事、柿の木へいかぬ(イカメシイ)
 山伏が登りて柿を食ふ。何としてやらうぞ、イヤ
 シテ、山伏を荒立てれば却りて供をなすと申す程に、
 散々になぶって帰さうと存ずる。ヤア、あの柿
 の木の影へ隠れたを人かと思へば、あれは鳥じゃ。
 シテ ハア、からすじやといふ。
 アド 鳥といふ物はなく物じゃが、おのれ鳴かぬか。鳴
 かずは人で有らう。可笑をおこせ。射殺いてやらう。
 シテ 鳴かすは成るまい。こかあ、
 アド さればこそ鳴いた。さて能う能う見れば、あれは鳥では無い、狼じゃ。
 シテ 又狼じゃといふ。
 アド 狼といふものは身せせり(セウシイ体ノ動き)をして啼く物じゃが、なかぬか。鳴
 かずは人で有らう。鉄砲を持て来い、打ち殺いてやらう。
 シテ 身せせりをして鳴かすは成るまい。さあ、
 アド さればこそ啼いた。さてさてさあつは物まねの上手なやつで御座る。今度はちとさ
 やつが困る事が有りさうな物じゃが……



考 わわしい女—狂言の女
 「踏取」や「内侍」に出てくる女は強い
 女です。「川上」になると、強さだけでは
 なくて優しさもあって、夫のとやりの
 なかで強くなっている。別れ話もちけ
 られても別れることを肯んじない女の執念
 があって、それに對し男は簡単にあきらま
 してしまふ。男の眼をあけてくれた地蔵も
 罵るまでになるのですからたいへんなもの
 です。女の強さというが、家を支えている
 のが女だという自信が、判白から感じられ
 ます。
 (野村胡堂「狂言と私」)

●幸若舞・説経節 室町時代後期には、物語に合わせて舞われた幸若舞(曲舞)が行われた。「義経記」「曾我物語」(P.83)など軍記物語の内容をもとにしたものが多く、武将たちの間で人気が高かった。
 また、庶民の間では、説経節と呼ばれる民衆の悲痛な物語が、「さくら」という楽器に合わせて語られていた。「山椒太夫」や「小栗判官」などが有名で、残忍な場面もリアルに取り上げられており、異彩を放っている。



説経節「山椒太夫」 フシ あらいたはしやな姉御様は、づし玉殿にすがりつき、やあ、いかにつし玉丸、我が国が復讐には、六月朔日に、夏越の祓ひの輪に入るとは聞いてあられ、これは丹後の習ひや。さらば食事も賜らず、干し殺すや、悲しやと、姉は弟にすがりつき、弟は姉を抱きつきて、流涕(涙が流すこと)魚がれてお泣きある。
 新仏教の発展とともに、和讃と呼ばれる仏教讃歌が親鸞や一遍によって数多く作られ、民衆の中で広げられた。また、東



下座(職人尽歌合)

●小歌 室町時代になると、七五調をもとにしたながらも、自由な詩型の小歌が流行した。男女の間の恋情をうたったものが多く、話し言葉や対話など、大胆に口語を取り入れられており、庶民の情感を生きたと伝えている。
 (閑吟集(一五八)や「宗安小歌集」など小歌の歌集も編纂され、その中には、謡曲や狂言、御伽草子の詞章と似たものも多く、相互の深い影響関係が考えられる。「田植草子」は、中国地方の田植えの時の歌謡を集めたものである。

小歌 独り寝はするども 嘘な人は嫌よ 心は尽くひて 嘘無やなふ 世の中 嘘が去ねかし 嘘が
 (閑吟集「から」)

語注 *ささら 竹の先を細く切って、東ねたものを、朝み目のある棒にすり合わせて音を出す楽器。
 (語注) *ささら 竹の先を細く切って、東ねたものを、朝み目のある棒にすり合わせて音を出す楽器。

